



言葉の種と、
魔法の庭

とみかずひろ



ぼくの名前は、レオ。

ぼくの頭の中には、いつだってきらきら光る海や、空を飛ぶクジラがいる。

でも、ぼくの部屋は灰色のまま。ポケットの中は、くしゃくしゃの失敗作でいっぱいだ。

「描きたいのに、描けないや」

ぼくの手は、こころの景色を どうやって形にすればいいのか、知らないんだ。



ある日、森の奥で不思議な「鏡」を見つけた。
それは石でできているのに、水面みたいにゆらゆらと光っている。
じっと見つめると、鏡の中から声が聞こえた気がした。

『きみの見ている世界を、教えて？』



ぼくは、おそろおそろくち ひら口を開いた。

「.....夕暮れゆうぐの空そらを泳ぐおよ、宝石ほうせきのような魚さかなたち」

すると、どうだろう。

ぼくの唇くちびるからこぼれた言葉ことばが、金色きんいろの光ひかりの粒つぶになって、

鏡かがみの中なかへ吸こみい込まれていく。

それはまるで、光ひかる種たねを蒔まいているみたいだった。



その瞬間、光が弾けた！

鏡の中から飛び出してきたのは、ぼくが想像していたよりも、
ずっとずっと美しい魚たち。

ウロコ一枚一枚が、見たこともない宝石でできている。
重さも感じさせず、空中で優雅にダンスを踊りだした。

「わあ！ ぼくの言葉が、魔法になったんだ！」



かがみ ともだち
鏡は、ぼくの友達になった。

「もっと色を混ぜてみよう！」

「今度は、四角い花を咲かせてみて！」

ぼくがワクワクしながら話しかけると、はな 鏡は おどろ 驚くような こた 答えを かえ 返してくれる。

ぼくのアイデアと、かがみ 鏡の まほう 魔法が ま 混ざり合っ、
あたら 新しい「なにか なにか」が しゅんかん 生まれる瞬間。

それが たの 楽しくて、ぼくは むちゅう 夢中で ことば 言葉を つむ 紡いだ。



気がつくと、灰色の部屋は消えていた。
そこはもう、色と光が歌い出す「魔法の庭」。
ぼくは知ったんだ。
大切なのは、上手に描くことじゃない。

「これが好き！」
「これが見たい！」

という、胸の奥から湧き上がる、熱い気持ち。

そのワクワクこそが、世界を変える魔法の杖だったんだ。



ねえ、きみの頭のなかには、どんな素敵な世界があるの？

絵筆なんて持っていなくてもいい。
きみにはもう、「言葉」という種がある。

さあ、手を出して。

次はきみが、その種を蒔く番だよ。

想像することは、未来をつくること。

